

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会主催

作文コンクール

『わたしの夢、

ぼくの夢。』



受賞作品作文集

平成 29 年 11 月 4 日

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

子どもの貧困が社会問題となって10年近くが経ちますが、子どもの貧困率はますます悪化しています。特に母子家庭などの「ひとり親世帯」の子どもたちの貧困率は最悪とされています。最近はこども食堂や塾に行けない子どものための学習支援等々、民間の子ども支援が注目を集めています。

そこで、ひとり親世帯の子どもたちの現状と心情を知り、政策に活かしていくために、こども達の声を知る作文コンクールを実施することにいたしました。

11月4日には、横浜市のこどもの国にて表彰イベントを行い、受賞者とそのご家族を招待し表彰いたしました。

主催は「ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会」とし、後援は、厚生労働省、こどもの国、母と子支援議員連盟にご協力いただきました。

子どもたちの作文を是非よんでいただきたくお願いいたします。

敬具

2017年11吉日

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

委員長 赤松 良子

(元文部大臣、日本ユニセフ協会会長)

開会の挨拶

私がたずさわっているユニセフは、飢餓や紛争に苦しむ世界中の子どもたちを応援しています。

日本の子どもたちはそうした絶対的貧困の中に放り出されているわけではありませんが、7人に1人の子どもが相対的貧困を強いられています。それもひとり親家庭の子どもに顕著です。

経済だけが人生を左右するわけではありません。しかし経済格差が教育格差までもたらしているのは事実であり、そうしたひとり親家庭の母と子を支援しようと活動してきた「母と子支援議員連盟」の国会議員の方々と、ひとり親家庭の母親の就業支援を続けてきたNPO法人あごらの皆様が主導して、この作文コンクールが実現しました。

子どもたちの作品ひとつひとつにこめられた夢が叶うよう、私たち大人は子どもたちの思いを今後の政策にしっかり活かしていくことを、今日は全員で確認する機会にしたいと思います。

このコンクールのプロジェクトにたずさわって下さったみなさまと作品を寄せてくれた子どもたちにお礼を申し上げますと共に、入賞者のみなさまに「おめでとう」の言葉を贈ります。

2017年11月4日

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会
委員長 赤松 良子

入賞作品

小学生部門

優秀賞	みんなで力を合わせて	田中 潤	小学6年生	大阪市北区
準優秀賞	せんせいをめざしているわたし	森 優衣	小学1年生	大阪府豊中市
佳作	わたしの夢、ぼくの夢	辺見 天佑莉	小学5年生	大阪府豊中市
佳作	二人三きゃくで歩む道	小野尾 恋夏	小学6年生	東京都江戸川区
佳作	ぼくの夢	清水 あれん	小学3年生	東京都昭島市

中学生部門

優秀賞	わたしの夢、ぼくの夢	結城 凜太郎	中学3年生	横浜市旭区
準優秀賞	わたしの夢、ぼくの夢	山口 芳純	中学1年生	鹿児島市
佳作	わたしの夢、ぼくの夢	羽土 風有奈	中学1年生	大阪府貝塚市
佳作	信じて下さい	倉橋 明子	中学1年生	鹿児島県西之表市
佳作	私の思い	田中 美咲	中学2年生	大阪市東成区

高校生部門

優秀賞	わたしの夢、ぼくの夢	山田 太郎 (仮名)	高校3年生	東京都渋谷区
準優秀賞	ただ1人の人間	一森 明咲	高校3年生	大阪府貝塚市
佳作	夢と現実	廣瀬 菜海	高校2年生	東京都北区
佳作	わたしの夢、ぼくの夢	生島 優	高校2年生	宮崎市
佳作	わたしの夢、ぼくの夢	横井 由希恵	高校2年生	大阪府泉大津市

みんなで力を合わせて

田中 潤
(小6)

私の夢は、絵本作家になることです。

きっかけは、学校の図書館で「ヨシタケシンスケ」さんの絵本を見つけた時でした。ヨシタケシンスケさんの絵本は、とても面白くて、おだやかな気持ちになれるものでした。それを見て私は、「こんな絵本、かいてみたいなあ。」と思ったのです。ほかに夢がなかった私は、絵本作家になろうと決心したのでした。

絵本作家になるために、今頑張っている事があります。それは、想像力を働かす事です。想像力を働かすためには、たくさん、色々な経験をしなければなりません。なので私は、学校の友達と、どんな学校やどんな町がよかったなどを自由長にまとめていたり、絵本に出てくるシーンを出来るはんいでやってみたり、実際の絵本のお話をつなげて、オリジナルの紙しばいを作ってみたりしています。頑張っていることは、それだけではありません。子供受けするような絵を研究したり、書けないポーズなどは、鏡の前でポーズをとって写したり、いろいろな人の絵本を読んで学んだりしています。最近では、少しでも視野を広げられるように、英語の勉強をしたりして、色々頑張っています。絵本作家になるのは、簡単ではないけれど、私は少しの可能性を信じたいです。

今から、私の考え、意見をお話したいと思います。まず、私の夢とともに、社会が晩婚や少子化に向きあっていけば、私の夢は叶うと思います。その理由は、晩婚が進むと、子どもが生まれる可能性が減ったり、生まれたとしても、子供の生まれる数が少なくなったりして、少子化につながると言う訳です。少子化が進むと、大人が少なくなり、やがて年金を納める人が少なくなり、未来では、年金がもらえなくなるかもしれないのです。問題は、それだけではありません。子供が一人しか生まれなくなると、その子供が大人になった時には、もう両親はお年よりになっているのです。なので、このままにしておくと、一人で二人を支えることとなります。さらに、今では結婚をしない人が増えてきていて、子どもが急激に減っているのです。このようなことは、絵本作家にとってはとても重要なことなのです。なぜかと言うと、絵本を見るのはほとんど子供です。なので子供が減ると言うことは、絵本を買って読む人が少なくなるということです。子供が少なくなるだけではありません。大人数は子供の数より多くなり、子供だけでは支えきれなくなります。その子供たちが大人になったとしても、大人数が少ないため、また子供が生まれる数が少なくなって、どんどん進んでいきます。最近では地球温暖化が進んでいますが北朝鮮のことでいっぱい、なにもしてくれはしません。なので、自分たちで地球温暖化をくいとめて、子供の住みやすい環境をつくるのです。このような問題一つ一つをゆっくりでもいいから順番に解決していけばいいと思います。一人一人が自分の出来ることをやり、みんなで協力すれば、いつかは必ず、とてもきれいで、すてきで、幸せいっぱいの明るい世界が手に入り、子供たちも幸せいっぱいで絵本を読めます。どんなにつらいことがあっても、その世界を見れば、すぐに笑顔になる、そういう世界を、宇宙を私はつくりたいです。

どんな夢でも、一人で叶えることは難かしいです。夢をかなえるには、多くの人達の方がいます。たとえば、友人や家族、学校の先生など、多くの人達です。その人達全員が力をあわせ、助け合うのです。そうすることで、一人一人の夢が叶うのです。私は思います。この世に必要なのは、助けあうということ。

九月二十日 おわり

読んでいただき、ありがとうございました。

「せんせいをめざしているわたし」

森 優衣
(小1)

「はいはい」とみんながてをピンとさせて大きくあげます。そのたびにせんせいは、「もりさんどうぞ」とてをむけてくれます。あてられると、じぶんのいいたいことがいえてみんなのまえではっぴょうできるからるんるんっというきもちになれます。また、うんどうかいのれんしゅうでは、みんなのまえで、たのしいダンスをおどっておてほんとなってくれます。しらなかったダンスをおどれるようになって、じぶんがおともだちにおしえてあげられるのでえっへんとむねをはれます。

わたしもたくさんべんきょうして、せんせいのようにこどもたちにえがおになってもらったり、じしんをもってもらったりしたいです。そのために、さんすうプリント十まいとかんじを四まいしています。また、ちいさいこどもにやさしくしたり、いろいろなことをおしえてあげたりもします。

わたしのゆめをかなえるためには、だいがくへ行ってべんきょうをしなければいけません。たくさんのおんをよまなければなりません。まわりにたくさんのおんせいはいるけれど、どうやってなればいいのかおしえてくれません。だから、せんせいになるためのべんきょうをしているおにいさんやおねえさんに、どうしたらせんせいになれるかおしえてもらいたいです。ねんれいがちかいほうがききやすいです。なりかたがわかったら、そのひととをなじようにべんきょうをしていきます。おかあさんがひとりでそだててくれているので、うちのちかくにある大きなしろいおしろのようないえよりももっと大きないえをたててあげたいです。そして今までがんばってくれてありがとうとつたえたいです。せいじかのひとは、もっとべんきょうしてこまっているひとにおかねやチャンスをおあげて、みんながえがおでおなかいっぱいごはんがたべられるしゃかいにしてほしいです。

「わたしの夢、ぼくの夢」

辺見 天祐莉
(小5)

私の一番の夢は、心身ともに元気で天寿を全うすることである。これは、個人的な夢というより義務感に近いかもしれない。

なぜ、私が元気で天寿を全うしたいかという、人間は元気で天寿を全うできるわけではないからです。世界中を見ると、貧困や戦争などで、大勢の人がなくなっている。日本においても、事故や天災や病気で、数多くの人なくなっている。

私の母には妹がいた。若くして、病気のためなくなると聞いている。私の母には、小さいころから母がいなかった。そのこともあり、とても仲のよい姉妹だったと、祖父から聞いたことがある。たった一人の仲のよい妹がなくなったとき、母は非常になげき悲しんだと聞いた。私にも妹が一人いるので、母の悲しみが、少しだけ想像できる。

母はよく、「子どもは親よりさきに死んじゃいけない。子どもが元気に生きていてくれるだけで、親はしあわせ」と言う。この言葉は、母の妹がなくなったときの、祖父の悲しむすがたを目のあたりにしたことと、大きく関係していると思う。

私の家には父がない。私の妹が0歳の赤ちゃんのときに、父がとつぜん入院することになり、それ以来、私の日常から父が消えた。父が元気なまま、今もいてくれたら、どんなによかったかと思うことは正直ある。しかし、私は、今、不幸ではない。なぜなら、私のことを愛してくれる母と妹、そして祖父と曾祖母がいるから。私は、大切に大好きな家族のために、心身ともに元気で天寿を全うしたい。大切な人を悲しませたくない。このことが、私の一番の夢であり、願いであり、そして生きる上での義務感…みたいなものである。

私の二番目の夢は、将来、助産師か、看護師になることである。理由は、医りょうにたずさわる仕事がしたいことと、自然で安全なお産に興味があるからである。また、ひとり親家庭なので、手に職をつけたいことと、大切な家族が病気になっても、手助けできるようになりたいからである。

母は、私の妹を産むときに、死にかけた。あのときの、母が死んだらどうしようと不安でいっぱいだったときの気持ちは、今でも、忘れることができない。きっと、一生忘れることは出来ないだろう。

あのとき、父が小さな私をぎゅっとだっこして、「ママも、赤ちゃんも、きっと大じょうぶだから」と言ってくれたけれど、父の手は、少しふるえていたことを、今でも、はっきりと覚えている。

人間が、あたりまえのように毎日をすごせることは、とてもきせき的なことだと、つくづく思う。今こうして、母と妹と、元気にくらしていけることに、とても感謝している。

私の知る限り、日本の医りょう技術はすばらしいと思う。健康保険制度もすばらしい。

私たちは、日本に住んでいるおかげで、安心して医りょうを受けられる。しかし、このまま、少子高齢化が進むと、今の制度はたちゆかなくなるといわれている。私の将来の夢

である助産師、看護師に無事になることが出来ても、皆が安心して医りょうを受けることが出来ないのでは意味がない。

私が将来、助産師や看護師になるためには、たくさん勉強しなければいけないが、進学にお金がかかることも知っている。私なりに、社会がどのように変化すればよいか考えた。

まず、健康保険制度など健康を守るための制度の維持、次に、私たちのようなひとり親家族を含め、お金のために進学が困難な家庭に対する教育費の支援です。

子どもは、未来の国の宝であると思います。そして、健康と教育こそ、ひとり親家庭に限らず、すべての子ども達の夢をかなえる最大の支援だと私は確信しています。

二人三きやくで歩む道

小野尾 恋夏
(小6)

私の夢はWNBAの選手になることです。私の家は、私が四年生の時に離婚をしました。とつ然離婚の話を母から聞いた時はビックリと同時に悲しさがこみあげてきて気がつけば涙がでてきてねむれなかった夜を覚えています。私は6年間バスケットを習っているのですが、もともと母がバスケットをやっていたため習い始めたという母のえいきょうからバスケットを習い始めました。始め、なんどもやめたいと思ったしやりたくないと思った時も、そんなとき、いつも母がはげまして支えてくれました。時にはプレーなどでケンカする事もあったけどいつも正面からぶつかってきてくれる母の存在はとても大きかったです。でも、そんな母が離婚したと聞いて「なんで！」と少しおこった気持ちも母にもち始めました。そして私は度々、母に反こうするようになっていました。それでも母は、私がいくらふてくされても一生けん命バスケットを私に教えてくれました。また私にバスケットを教えるだけでなく、世間にも「母子家庭だから・・・」とか言われないように一生けん命、仕事、家事もこなしてくれたし、私のチームは親もつきそいでやっていくチームなのですが、それでも母は離婚した後も貴ちような休日を私のバスケットのためについやしてくれました。そのため、ストレスもそうとうにたまっていたらしく、なんと母は精神が安定しない心の病気になってしまいました。それを聞いた私は、今まで、母が私達のために頑張ってきてくれた苦勞が目にかびました。だから私は母に恩返しをしようと思いました。私に時間、精神を一生けん命けずってくれ教えてくれたバスケットで母をよろこばせてあげたいと思いました。今度都大会があります。1回戦目の相手は強くて、手強いけど、今まで母とともに二人三きやくでやってきたことを思い出して絶対勝てるように頑張りたいです。そして賞状を母に持っていき「ありがとう。」と日々の思いを伝えるようにしたいです。また大人になっても、女子バスで活やくできるように頑張りたい世間の人からも「母子家庭なのに・・・。」と言ってもらえるようになりたいです。また同じ母子家庭の人に、元気や世間の目にこわがらず母子家庭でも何でもできるという勇氣と自信をもってほしいです。また世間の人からも母子家庭をみとめる人が増えおたがいに歩みあっていけるようになりたいです。

「ぼくの夢」

清水 あれん
(小3)

ぼくの夢は、きょうみがあることを好きなだけ勉強することです。まだ小学三年生なので、しょうらい何になりたいかはわかりません。でも、今は、いろいろなことを勉強するのが楽しいです。

理科の実けんも好きだし、英語の勉強も好きです。特に好きなのは、歴史の本を読むことです。ようち園の時から、日本の歴史の本や武しょうの伝記を読むのが大好きでした。さいきんは、三国志とか、中国のれきしの本を読むのも好きです。

ぼくの夢がかなうためには、みんなに二つのことを知ってもらひつようがあります。まず、岐阜テッドという子供たちがいることです。ぼくも、ギフテッドの一人です。お医者さんにみてもらいましたが、ギフテッドであると言われました。

ギフテッドとは、IQが高く、とくてんのぶんやの勉強がとくいな子供のことで、ど力をして勉強するしゅう才とはちがい、しつ問をしながら学んだり、新しいことを考え出すことにきょうみがあります。

アメリカには、ギフテッドの子供のし立の学校があったり、公立のギフテッドの子供のプログラムがあります。ギフテッドの子供は、とくいなぶんやの勉強は、ふつうよりも学習のはやさはやいし、勉強のしかたもふつうとちがうので、とくべつなじゅぎょうがひつようです。

二つ目に知ってほしいことは、ひとり親の家庭の子どもは、好きな勉強をする自由がありません。日本には、アメリカのように、公立の学校にギフテッドのプログラムがありません。

いっぱい勉強をしたければ、国立やし立の学校に行くひつようがあります。でも、じゅけんをするには、じゅくにいかなければならないし、国立とし立の中学に行くのは、ただではありません。今、ぼくは、お母さんが一生けんめいにはたらいてくれているので、お医者さんがすすめてくれた、じゅくに通っています。でも、もし、じゅけんにかかったとしても、国立の中学校に通えるかはわかりません。

ひとり親家庭のギフテッドが、いっぱい勉強したいという夢をかなえることは、今の日本ではむずかしいです。アメリカのように、公立の学校でギフテッドのプログラムがあって、ただで通えるわけではありません。

もし、社会が公立のギフテッドのプログラムを作ってくれたり、ひとり親の家庭の子供が、じゅぎょうりょうをきにしないで、公立である国立の中学校に通うことができれば、ぼくの、というか、ぼくのようにひとり親の家庭のギフテッドの子供の、好きなことを好きなだけ勉強したいという夢がかなう日がやってくると思います。そんな日が、一日でも早く日本に来てくれればうれしいです。

「わたしの夢、ぼくの夢」

結城 凜太郎
(中3)

世界の「格差」が、僕の夢を生んだ。

今、アジアやアフリカを筆頭に、世界中には満足に医療を受けられていない人が、数えきれないほどいる。彼らは、近くに病院、そして医療品さえもない。それに対して、日本は多くの場合、すぐに病院に行ける。しかし日本でも、近くに病院がない人や、足が不自由な人、高齢者や体調の悪い人などは、必要な時に病院に行くことが負担となることが少なくない。同じ世界で、こんなにも差があるのだ。僕は、衝撃を受けた。

「病院に行けない沢山の人々を助けたい。」これが、僕の夢だ。満足に医療を受けられない人達を救うために、僕はAIと携帯端末、ドローンを使った「いつでも、どこでも、誰でも受けられる」医療を提供したいと思っている。病院に行かなくても受けられる医療が実現すれば、多くの人の助けになるはずだ。また、AIを使うことで、人件費を削減し、貧しい人々に無償で提供することが可能になる。

そんなアイデアを実現するためには、僕はこの先沢山学ばなければならない。ぜひ大学に行って、そしてお金の心配をせず、自由に学びたい。

しかし、今、日本では学びたい人にとって「教育格差」という大きな壁がある。学費が問題で、行きたい大学に入れない優秀な人が多くいる。大学だけが唯一の学ぶ道というわけではないが、大学でしか学べないことが沢山あるし、専門性や分野性でも、大学で学ぶことはとても大きい。研究などで大学院に進み、博士号の取得までする場合、平均で一千万円はかかるらしい。奨学金は、他国のような給付型ではなく、貸付制度。調べてみると給付型でないのは、日本と韓国の二ヶ国だけだという。この制度では、学生への負担が大きすぎる。

「学ぶこと」は大切だ。志があって学ぶ人たちが、学びたい大学で勉強するためには、今国会で議論されている「大学の無償化」が必要だと思う。同じ学力でも、持っているお金の額が違ったら大学に入れる人と入れない人がでてくる。このような「格差」をなくし、平等に学ぶ機会が与えられれば、今よりもっともっと優秀な人材が出てきて、日本はより発展していくはずだ。

世界中で、満足に医療が受けられる人と、受けられない人がいる「医療格差」。そして学びたくても、学べる人と学べない人がいる「教育格差」。「格差」は世界中に沢山あるが、もしなくなったら、テロをはじめとする紛争や、様々な社会問題の解決につながるはずだ。

教育の無償化は、きっと僕の夢の実現の追い風となってくれる。僕はまだ「医療格差」をなくすアイデアの実現に必要な、知識や技術を持っていない。

だからこそ、日々夢を追い続けて、学び、努力していきたいと思う。

「わたしの夢、ぼくの夢」

山口 芳純
(中1)

「いってらっしゃい。今日もがんばれ。」

僕が塾へ行くときに母が、いつもかけてくれる言葉です。僕が塾に通い始めたきっかけは二つあります。

一つ目は、仲のよい友達が小学校低学年から塾に通っていて有名な私立中学校を目指しており、合格しました。僕は、すごいなと思うと同時に、「僕は、県で一番の公立高校に行こう」と心に決めました。

そして二つ目は、弟が八ヶ月の頃「川崎病」という心臓の病気にかかって、今まで数回入院しており、母も付き添いで行きます。今も心臓の血管に冠動脈瘤という、こぶが三カ所あり定期的に検査に行っています。母の話によると、入院中はずっと点滴をしていてトイレの時も点滴を持って行ったり、着替えは看護師さんのお手伝いが必要だそうです。足のつけ根から心臓まで、カテーテルという管を入れる検査の時は、朝から夕方まで全身麻酔をしてするそうです。母は弟の目が覚めるまでとても心配だそうです。弟は薬を飲んでいました。赤ちゃんの頃は四種類も飲んでいました。その上、食べ物の制限もありました。今は薬も一種類になり、自分で飲んでいます。食べ物も何でも食べられるようになりました。僕もまだ幼かったけど弟が帰って来るまで心配だったし、母がいなくてさみしい思いをしました。それに点滴が外れないように包帯でぐるぐるまきになっている弟の写真を見て、とてもかわいそうでたまりませんでした。

そこで、僕は決めました。僕の将来の夢は弟のような患者や病をかかえる人々に笑顔を届ける医者です。この夢を叶えるために、ひたすら勉強しています。

僕は、小学校の頃に塾の模試を受けてみました。結果は惨敗でした。そこで僕は初めて学校のテストと受験用の試験は、全く別物だという事を思い知らされました。今、塾に通わせてもらっています。塾の費用は、母にとって負担が大きすぎるため一度はあきらめました。しかし、祖父母にお願いして将来必ず費用を返すという条件で払ってもらい、塾に通える事になりました。週三日の授業ですが、授業のない日も自習をするためバスで通っています。帰りは十時十分に母が迎えに来てくれます。正直、帰宅後は眠いですが母も同じはずです。夏休み等は、朝からなのでお弁当を持たせて送り出してくれます。金銭面でサポートしてくれる祖父母、健康管理や送迎でサポートしてくれる母には、本当に感謝しています。

僕は、この事から一つの考えがあります。それは、学習の意欲がある人に対しては、条件を付ける等して塾の費用を助成してもらえらる制度を作ってほしいと思います。そうすれば、夢が夢で終わる事なく実現に叶えられる人が、きっと増えるはずです。

僕は、先日行われた全九州模試で、理科が千百十四人中、四位でした。点数は九十七点。日頃の努力が少し表れたようでうれしかったです。これからは、他の教科でもこのような成績が取れるよう、ひたすら努力するのみです。

僕の好きな、鹿児島出身の水泳のオリンピックメダリスト宮下純一選手の言葉に「念ずれ

ば通ず」という言葉があります。僕はこの言葉を胸に、今の僕に与えられた環境で、絶対に夢を叶えて、母を楽にしたいです。

「わたしの夢、ぼくの夢」

羽土 風有奈
(中1)

わたしの夢は、看護師になる事です。

なぜなら、うちの家は母子家庭で、わたしは産れた時から父親がいなくて、父親の顔を知りません。だけど、お母さんが昼も夜も働いて子供4人育ててくれています。夜のバイトを始めて、家で血を吐き救急車で運ばれ手術をしました。その頃は私はまだ3才で何が起きたのかもわからなかった。

お姉ちゃんは子供を産んで一人で子供を育てています。でも病気を持っているので、お母さんは仕事の帰り毎日様子を見に行ってから帰って来ます。お兄ちゃんは大きな会社に入ってお母さんに楽をさせてやりたいから、がんばっていい大学に今年入学しましたが、遠すぎて通えなくなり、一人暮らしをやむ得なく始めました。お姉ちゃんが病気なので、お母さんはお兄ちゃんが一人暮らしで病気になったらあかんと、家で野菜中心のオカズを作り、2週間に一度下宿先に運んでいます。毎日仕事ばかりで、友達と、ご飯食べに行く事もなく、美容院だって一年に一度行くか行かない位で、かみの毛はいつもバサッと束ねたままで、白髪も生えてて、そんなお母さんが、わたしの中学校の参観とかに来られるのが少し嫌だった。

でも、そのお母さんが、体調が悪いと言って病院に行ってみると、脳動脈瘤というコブが出来ていたらしく、早急に手術をしないといけないと医者から言われた時、お母さんは子供たちの学校行事などを一生懸命考えて、入院の日にちを考えていました。

今はわたしとお母さん2人暮らしなので、お母さんが入院してしまうと私が一人になってしまうし、お姉ちゃんは病気を持っているのでしんどくなったら倒れます。

大阪におじいちゃん、おばあちゃんが居るけれど、先日おばあちゃんがこけて、骨を折って入院して、お母さんは週に2回位、大阪の病院におばあちゃんのお世話をしに行っていました。

9日始めに退院したけれど、まだ普通には歩けません。だから、お母さんは、皆に迷惑をかけたらあかんからと一生懸命自分の入院を悩んでいます。

この前、お母さんが、「あんたも、もう理解出来ると思うからよく聞いてな」と言って、わたしに、自分の病気の事、入院した時の事、お母さんが入院したら、お給料が入って来ない事など、聞かされました。

わかるような、わからない様な感じですが、お母さんが大変な事になってるんやと言う事だけは理解出来たし、本間に死んだらあかんという気持ちばかり頭に浮かびました。お姉ちゃんは、一生治らない病気なのに、国からは何の援助もしてもらえない。

仕事の面接で、「病気持ってます」と言うと必ず落とされる。そら、健康な人が、あふれてる世の中やから、わざわざ病気の人を雇ってくれる訳がない。お金持ちで、買いたい物買って、欲しい物は買ってもらって。わたしは、クラブの靴が破れても、お母さんになかなか買ってとよう言わなかった。もっと国が、こんな生活をしてる人達を救ってくれたらいいのに。難病でなくても病気と戦ってる人はたくさんいる。

私のお母さんやお姉ちゃんみたいに。お母さんに腹立つ気持ちはないけど、もっと国が少しでも助けてくれたら、わたしたちみたいな家族も普通に暮らす事ができるのに。だから、わたしはお母さんに色々話を聞いて。仕事が絶対にあって、たくさん給料のもらえる看護師さんになろうと思っています。病気の勉強もたくさんすれば、お姉ちゃんの病気を治してあげられるかもしれないし、わたしが看護師になる頃には、お姉ちゃんの病気が治る薬も出ているかもわからない。

わたしが、働いたら、お母さんに美味しい物食べに連れてってあげたり、生活を少しでも楽にさせてあげたいと思います。頑張った人にはごほうび。

一生懸命、女手一つで子供4人育ててくれたお母さんに、ごほうびをあげたい。これが、私の夢です。

「信じて下さい」

倉橋 明子

(中1)

「私は、青年海外協力隊になりたいです。」

発表した私は、少し不安を感じました。本当にこの夢をおいかけていいものか。あきらめて、妹に島をはなれた高校に行かせ、大学に行かせるか。私の家族は、6人家族です。母と兄が2人と姉と妹そして私。三年生の時わけもわからないまま、父をおいて引っこしました。正直母の収入だけで五人も養うのは大変です。だから、私の兄も姉も行きたかった島外の高校をあきらめて、種子島内の高校に行きました。一番上の兄は、高三です。大学に行くか、働くのか。兄は、大学に行く道を選びました。もちろんお金がかかります。今でさえ、しょう学金というものをかりているのにもっと大変になります。そんな兄、姉をみてきて、とても夢をおいかける状況ではないなと思いました。私は母がとてもせつ約上手だなと、思います。それは、私が「おかし買って！」と言うと「今、お母さん五百円しかもってない。」私はびっくりしました。五百円をもって店に来て、何が買えるでしょうか。夜ごはんを買いに来たのに五百円。私は、本当に母はせつ約上手だなあと、思います。あと、お金をおろしに行くとき必ず、「無いお金をおろしてくるね。」と言います。私の家は、お金がない。そう思うと悲しいですが、母のおかげで大きな不自由は、ありません。でも、友達と遊びに行く時、お金が無いことを知ってる私は、母にお金ちょうだいと言えません。だから、私だけ何も買わないこともあります。

私は、しょう来のことが心配でしかたありません。私は、夢に向かって近道をしたいと思っています。でも、種子島の高校に行くと思います。というか、そこしか行けません。大学に行くにしても、種子島には、大学がありません。高校のときかりたしょう学金を返す。それもすごく重荷ですが、お金が無いから、夢をあきらめるのは、違うと思います。私は、この世界が、努力して夢がかなう世界になれば、いいなと思います。実力がある人が、お金が無いから夢をあきらめてしまうような世界であってほしくないと思います。島に住んでいる私は、都会のことなんて何も分かりません。大学は、どんなものなのかも分かりません。でも、貧ぼうな私でもでんたくしが一つだけだと、夢を追いかける、希望も優樹もわいてきません。だから、こんな私でも、いろんなせんたくしがあってほしいと思います。この世界が、大人たちの自分の利益だけ考えているような人が消え、子供たちに、夢や目標をあたえてくれる人が増えたらうれしいです。

細かいことを言えば、高校が無しょう化になってくれればいいなと思ってます。母が頭をかかえている姿は、見たくないです。「お金」それは、人を幸せにする物。時には人を不幸せにするもの。「お金」の存在。それは、物すごく大きくて、小さいもの。お金に左右されない大人になりたいです。もし私の夢が叶うなら、はっきり言います。

「私の夢は、青年海外協力隊です。そのために看護科のある高校に行って、看護師の免許をとります。現地で貧困に苦しむ子どもたちに、夢、目標を与えたいです。そして働いたお金の生分のは、子どもたちの教育のお金に、使ってもらいたいです。」

今、書いた私のいろんな夢を大人たちは笑うかもしれません。むりだと笑うかもしれませ

ん。でも、今の私の考えをより多くの人に知ってもらい、叶わなくてもこの文でまた夢を
追いかける人が増えるといいなあ。ちょう戦する人が増えるといいなと思います。だから
笑わないで下さい。私たちの夢をつぶすようなことは、しないで下さい。それ以上に、私
たちを信じて下さい。

『私の思い』

田中美咲
(中2)

私の将来の夢は、声優です。声優を目指したきっかけは、単に「アニメが好き！」「声優さんが好き！」という訳ではなくて、『人を笑顔にしたいから』です。私は、昔から人を幸せにする仕事につきたいと思っていて、年齢を重ねるにつれ、アニメを見るようになり、声優という仕事を知りました。声優に憧れるようになったきっかけは、声優という仕事を見つけたとき、絵を描いているのは別の人、絵だけでもおもしろいのに、声をあてることでさらにおもしろく、楽しませてくれる。さらに絵に命を吹き込むことができる声優さんはすごいと思ったからです。アニメを作るには、イラストやストーリー制作など、さまざまな仕事が協力することが不可欠です。共同してひとつの作品を完成させるアニメ現場のチームの一員に、声優という仕事を通して私も関わりたいと思っています。

私は母に声優になりたいといったことがありません。現実主義者の母に伝えても、本気と捉えてもらえないからです。「がんばり」、と口では言ってくれたとしても、心の底では無理だと思われることが目に見えているからです。今は昔みたいにアニメが好き、オタクだと公言しても変な目で見られることはあまりなくなりました。それでもいざ「声優になりたい。」と言っても「無理に決まってる」と決めつけられることが良くあります。たしかに声優になることができて、たくさんのお仕事に恵まれるかわからない職業です。でも私は売れるかどうかは重要ではなく、『声優になって、人を笑顔にしたい！！』と心から思っています。担当する声が主人公ではなくわき役でも、その役に全力をこめて声をあてたいと思っています。それでたくさんの方が笑顔になれるのなら私はそれだけで幸せです。これを聞いても自己満足だと思われるかもしれませんが、それは自分がよく分かっています。それだけで声優になれないことも分かっています。それでも、人の夢を聞いたとき、「絶対無理だ」と決めつけるのではなく、「夢に向かってがんばれ」と背中を押してくれる社会を実現させるには、まず、私たちが本気で夢に向かおうとしてしている姿を見せることが大切だと思います。大人はそのがんばりを認めて応援してくれる。それだけでいいんです。大人ではなくて私たちが変わることが社会を変える第一歩だと思います。そんな社会を実現させるには、私自身、変わることが必要だと思います。まずは、母に認めてもらえるように、公立高校進学を目指して、ひだまり学習塾での勉強を頑張ります。

「わたしの夢、ぼくの夢」

山田 太郎 (仮名)
(高3)

私は、医師を目指しています。今まで、役所、シェルター、母子生活支援施設、母子やDV被害者の支援団体の方々など、多くの方の助けを得て、今の自分があります。支援して頂いたことに感謝し、自分の興味のある医療という分野を通じて、社会に恩返しをしたいと思っています。それが、私の夢であり、志です。

医師をめざした動機を話します。私が小学生の時、父の母への激しいDVから、母子2人で家を出、父親に居場所を知られないため住民票を移さず、転校を繰り返し、名前も変えました。親は離婚し、母は深刻なうつ病、PTSDに陥り就労できる状態ではなく、生活保護に至りました。中学生になり、住所を明かさず、父親と面会を時折しましたが、父は、昨年、脳出血により急逝しました。父親には、自分の母親にした非人道的なこと、そしてそれが原因での苦労もあり、大げさにいえば根みを持っていました。一方、私には、息子として愛情を持ってくれていることも知っていました。複雑な気持ちもありましたが、葬式で父親の冷たい額に触れた時、人が死ぬとはどういうことかを知り、そしてどんなことがあれそれはとてもとても悲しいことであると痛切に感じました。この時、小さい頃から興味があり、職業体験や1日医師体験などを病院で行っていたこともあり、医師という職業になることを決めました。そして、今、どのような医師になりたいか、自分に問いながら、文金銭的心配と戦いながら必死で受験勉強に励んでいます。

医療に関して、日本では現状、問題が山積みです。今高校3年生として、自分の将来を考えると、自分は、どのように、どんなことに、解決・改善に助力できるか、ということを考えています。私は、医療問題の前提・原点として、患者さん中心の医療の推進が、目下の課題であると考えています。この患者中心の医療の実現への解決策として、以下のことを勧めていきたいです。まず、大学・職場での医療の倫理教育の充実、二つ目は、オンブズマン制度によって第三者の目で常にcheckを行うこと、三つ目に情報公開の促進、四つ目は、医療スタッフを充実させ患者さんの声を医療に生かすことです。私は、こうした事を改善していける医師になりたいです。

変えられたらと願う社会制度について、書きます。

第一に、奨学金制度の貸与型から給付制への変更です。

第二に、給付型の奨学金制度の充実を望みます。学費(施設費他含む)だけでなく、一定の生活費も支援があれば、学生も安心して学業に頑張れると思います

高校三年の現在、高校の学費に加え、大学受験料・入学金・前期授業料・保険料・施設費・他納入金、そして世帯分離し生活保護を抜け、児童扶養手当もなくなる大学入学後からは、学費・教材費・生活費(家賃・食費・光熱費雑費他)・定期代・交通費など全額を、アルバイトと奨学金だけで賄う予定です。理系の為学業と棺当額稼ぐ必要のあるアルバイトの両立に、大変不安に感じています。本当は、チームワークや体力を身につけ視野を広げ、人として大きく成長したく、大学時代に、部活動や勉強会・留学等もしたかったで、

すが、それはできません。それでも学費以外に、一定の生活費の支援もあれば、本当に助かります。

このような形で、人の優しさを感じた人間は、制度の温かさを知った人間は、将来社会の一員となり、その恩を返す人間になれると、私は強く思っています。

第三に、給付奨学金の対象の拡大を願います。

国、民間、首都圏の大学には、社会的擁護や首都圏外の困窮家庭の子供への給付奨学金制度は幾つかできました。そこに、生活保護家庭出身者を加えて頂きたいのです。首都圏であっても、生活保護家庭出身者の、「大学生活をスタートする事も、続ける事もできない」という窮状は、認識されていません。他の子供と同様に、どうか、学ぶチャンスを下さい。

最後に、私は、DV被害、ひとり親、生活保護、病気の母(世帯主)持ち、離婚した父を亡くすという、当事者として、様々な体験をしました。色々な思いも、金銭的な苦勞もあります。でも、不幸ではありません。色々な方々や制度の温かさに支えられ、高校三年生まで来られた事に、大変感謝しています。

そうした体験をしたからこそ、自分が医者として働くことが叶ったなら、特に患者さん中心の医療のためにできること、パラメディカルの方々としっかりとコミュニケーションをとり連携すること、患者さんと対等の回線にたつて病気だけでなくその病気が発生する根本の原因を見つけるためその方の置かれている環境・状況・事情・生活習慣ほかに目を向けられる医者になりたいと、強く思います。一人の力は微力ですが、そうして、世の中を変えていける人間になりたいです。そう思い作文に応募しました。

ただの一人の人間

一森 明咲
(高3)

小学生の頃、「障がい者理解学習のまとめ」というテーマで作文を書いた。作文を提出すると、先生に文中の障害者という部分の害の字をひらがなに書き直すように言われた。子供心にくだらないことにこだわるなあ、面倒だなあ、と思った。だが、こんな風を感じるのには自分がいわゆる健常者だからなのかもしれない、と考え直して言われた通りにすべて書き直した。それから、中学生になっても全ての害の字をひらがなで書いた。漢字に直せという先生はいなかった。だからそれ以上このことについて考えなかった。

高校一年生の春、私は悪性リンパ腫で入院することになった。治療にはげんでいたある日、抗がん剤の副作用で脳症と脊髄症を発症して身体をほとんど失った。治療がひと段落し、懸命な治療とリハビリで何とか使えるようになった右手を頼りに電動車椅子で学校に再び通いだした。高校にも障がい者理解学習のようなものがあった。やはり教科書にもプリントにも害の字はひらがなで印刷されていた。障がい者の立場に立ってみても、その文字を見てああくくだらないと昔と同じ温度で感じる自分がいた。

調べてみると、害の字がひらがなになっているのは「害という字は公害や害悪といったマイナスイメージのある語に使われている。その字を人を表すのに使うのはどうなのか。」という意見かららしい。少なくとも私は漢字で害と書かれていただけで差別されたとは思わない。もちろん、ひらがなで書かれていたからといって社会に受け入れられた、とも感じない。それに、もう少し調べれば障害者の障害とは社会が特定の特徴を持つ人に対して向ける障壁、バリアのことだと出てくる。老眼になった人は眼鏡をかければ前までほとんど変わらない生活を送ることができる。世の中から段差が一段もなくなれば車椅子に乗っていても他の人と同じように外出できる。眼鏡があるから老眼の人は障がい者ではないが、世の中に段差がたくさんあるから車椅子に乗る人は障がい者。つまり社会が、人を障がい者に行っているのだ。にもかかわらず、検索をかけるとたくさんの害の字をどうするか話し合った結論をまとめたページが出てくる。大の大人が何人も集まって大真面目にこのことを話し合ったのかと想像するとおかしくてたまらない。

人を気づかう気持ちは素敵だ。だが、その善意で表面的な字面を変えても自己満足にしかならない。そんなことよりも特定の特徴を持つ人を障害者に行っている社会の仕組みや人の考え方を考えていかなくてはいけない。集まって話し合う時間やお金を、例えば点字ブロックを付けるために使う。車椅子に乗っている人が坂道を上がりきれずに困っていたら、後ろから押す。困っているなあ、と遠巻きに見ているくらいならまず一言声をかけてみてはどうだろう。

小さな一つ一つが積み重なって、段差などの物理的な障害も特定の特徴を持つ人を敬遠するような周りの人たちの精神的な障害も全てなくすことができれば。基本的には自分の力だけでできる。けれどももし何か困ったときはきっと誰かが助けてくれる。そう思えば。今よりももっと気軽に、夜中に急にポテトチップスが食べたくなったとかいうしょう

もない理由で出かけることができる。そんなふうに社会や人が変わっていけば、誰かを障がい者と呼ぶこともなくなるのではないだろうか。全ての人がただの一人の人間になった世界。そんな世界が私の夢である。

夢と現実

廣瀬 菜海
(高2)

母は教育に関するお金を出し惜しんだことがない。ただの一度もない。家は貧しかった。それは両親が離婚する前も今も変わらない。服は誰かのおさがりばかり着ていたし、外食もほとんどしていない。他のどこを削ってでも母は教育の水準だけは絶対に下げなかった。私はそんな母にとっても感謝している。

しかし、最近では親の年収が子どもの学習を決めるといわれている社会で、私と同じように貧困な家庭にいる子供が教育をける機会に恵まれていないのが現状だ。なぜなら、学ぶために必要なお金は貧困な家庭に払える額ではないからだ。だからといって進学を諦めてしまえば、職業の選択肢が狭まり、自分の就きたい職に就けなくなったり、十分な収入が得られなくなったりしてしまう。学歴によって生涯賃金に大きな差が出るというのも有名な話だ。家庭の経済格差が子ども達の教育格差を生み、将来の所得格差につながって『貧困の連鎖』が起こってしまう。そうなってしまえば格差が広がっていくばかりだ。

だが、逆説的に考えれば教育の不足によって貧困に陥るのなら、すべての人が十分に教育を受けることができればこの連鎖を止めることができる。もちろん、原因のすべてが教育の不足にあるわけではないので一概には言えないが、端的な表現をするならそういうことになる。そのために国や地方公共団体の支援の充実は欠かせない。低所得世帯への学費補助を手厚くし能力に応じた教育を受けられる仕組みを国単位でつくっていくべきだ。

母が教育の優位さを感じていなければ、きっと進学しようと思わなかった。早く就職しようとして高校にもいかなかったかもしれない。そうならず今こうして大学進学に向けて勉強してられるのは、無理してでも学費を工面してくれている母のお蔭だ。そんな母の影響なのか、いつしか子どもの教育に関わる仕事に就きたいと思うようになった。私は普遍的に教育を受けられる制度と教育の質の向上、その両者が必要だと思う。それを実現するために実際に教壇に立つのではなく、文部科学省に入り、国内全体の教育をより良いものにしていきたい。貧困のせいで能力のある人が能力を発揮する機会に恵まれない社会を、私はいいとは思はない。私は変革を望む。待っていても変わらないなら自分で行動を起こすしかない。貧困な家庭の子ども達はもちろん、全ての子どもが何でも好きなだけ学べる社会を作りたいと強く思う。

この作文を書くにあたり、子どもの貧困について調べていたら、インターネットの検索候補に『子どもを育てるお金がない』と出てきた。それだけ金銭的に困っている家庭が多いことを痛感した。子どもの教育に十分なお金を支払えない親達もまた辛い思いをしているのだと思うと胸が痛む。私の夢が本当に叶ったときは検索候補からその言葉が消える時だ。

わたしの夢

生島 優
(高2)

私の将来の夢は医師になることです。小さいころ体が弱く、病院に通うことが多かった私は、優しく笑顔で声を掛けてくれる薬剤師に憧れ、自分もそうなりたいと思っていました。しかし、高校生になり進路について考えていくうちに、ただ薬を処方するだけでなく、患者やその家族と直接相談しながら治療法を考える、インフォームドコンセントがしたいと思うようになり医師を目指すようになりました。宮崎大学のオープンキャンパスや自治医科大学の説明会を通じて、宮崎県は山間部を問わず産科や小児科を始めとする、深刻な医師不足を知りました。そこで私は生まれ育った宮崎の地域医療の貢献がしたいと思いました。

しかし医学部に合格するためには、学校の授業だけでは厳しく、同じ医学部を目指すクラスメイトは毎日のように進学塾に通っています。最近、塾に行けない子どものための学習支援などがありますが、主な対象は小学生や中学生で国公立大学を目指す高校生対象の学習支援はほとんどありません。どんなに頑張っても勉強する気持ちがあっても、経済的理由で上を目指せないひとり親家庭の子どもは多いと思います。私も医学部に特化する進学塾や予備校に行きたいですが、経済的理由で諦めざるを得ない一人です。これでは貧困の連鎖を断ち切ることができません。以前母から見せてもらった新聞には、「子どもの貧困を放置して生じる経済的損失は、二、九兆円にもものぼる」と書いてありました。このようなことを防ぐためにも、社会制度をもっと改善すべきだと思います。例えば、大学進学を目指す高校生対象の塾や予備校の助成。次に、大学に進学した際に、収入に応じての給付型の奨学金を支給するなどです。こうすることで、安心して勉強する環境が整えられると思います。

いま私は、各種検定や医学部医学科が主催する地域医療の講演会などに積極的に参加し、医学の視野を広めています。夢を実現するために普段の勉強はもちろんのこと、高校卒業までに、英検準一級、数検準一級を取得し、必ず医学部に合格したいと思います。

そして私はひとり親家庭の子ども達に、自分の努力で貧困の連鎖を断ち切ることができるということを伝えたいです。

「わたしの夢、僕の夢」

横井 由希恵
(高2)

私の夢は3つあります。ちょっと多いけど夢は1つだけじゃないと思うから1つにはしぼりません。

まず1つ目は保育士になることです。小さい時はそこまでなりたいたってことはなくでも中学2年生の時はじめて保育園実習に行きました。そこでの経験が保育園の先生の姿を見てもっともなりたいたって思いはじめました。まだできない事も多くピアノをひいたり、絵本を読む練習からはじめてます。なにより子供たちの元気な姿を近くでずっと見られる仕事ってあこがれるしものすごくうらやましくなります。いつかその仕事がしたいです。

今はまだ夢から遠いからちょっとずつ近づけていけたらいいなあと思います。保育士は簡単そうに見られやすいけど私はそう思わないし、難しいこともあると思うし子どもたちの成長みていくことが達成感があるこんないい仕事はないと思います。

2つ目は1つ目とちょっと似ているけどちょっと違う仕事、児童養護施設を建ててそこで先生をやることです。なりたいたってのは最近のニューを見たのがきっかけです。ものすごく小さい子どもが自分を生んだ親に暴力ふるわれ苦しい思いをした子どもそんなニュースを毎日のように見るようになり、自分のなかでいろいろ思うことがでてきたりして、自分と仲のいい子でいつもはそんなふうには見えないけどお母さんにぎゃくたいされていたとうちあけてくれた子がいてそんなことを聞くようになりそんな時に思ったのがそうゆう時助けを求められる場所があれば亡くなっていくこ苦しむこが減ると思いました。

ならそんなことをするお母さんやお父さんも減ると思うし増やすことで回りがもっとつらい思いをしている子どもたちにきずいてあげられると思うし、そうゆう社会になってほしいと思います。

子どもは親を選べないように親も子どもを選べないだからこそお腹を痛めて産んだ子どもに暴力ふるう人や捨てる人が簡単に許されたり、たいへんだからしょうがないって思う人が増えていくんだと思います。ぎゃくたいの一番の理由って子どもと近すぎるから、それにたえれないお母さんやお父さんが増えたんだと思う。ならこの国がもっと子どもを育てやすい環境をつくってあげてほしいとすごく思います。自分の家は母子家庭だからちょっとだけ気持ちが分かります。母子家庭っておもってるよりもたいへんで見てるだけで心が苦しくなる。自分のせいでお母さんが無理してたりそれで倒れたこともあったから怖いし、そこまで無理してほしくないと思った。もっと育てやすかったらお母さんをらくにさせてあげられると思うし、そんなに無理しないと育てれない国はおかしいと思いました。

なら自分がちょっとでも助けれる環境を作りたいそれが児童養護施設を建てて先生をしたいと思ったのがきっかけです。

3つ目の夢は、いつか結婚して自分の子どもに人のためだと思える夢をもってもらうことです。私は自分より他人を大切にしたいと思っていて昔からそうお母さんにも教えられていてだから自分の子どもにもそう教えたいです。他人を大事にしてほしいと思います。

誰よりも幸せでそしてお母さんみたいな大人になりたいです。私の中で一番の尊敬できあこがれる人は自分の母親です。

いつかこの3つの夢をかなえることは時間もかかるし難しいことばかりだと思う。でもやりたいことをやりそれを仕事にできたりできるのは何よりも幸せだと思います。

この3つの夢をかなえることが私の夢です。

審査員長講評

審査員長の丹羽です。43通の応募作品は、優秀な作品が多く、甲乙つけがたく、審査は極めて困難でした。

どの作文も、ひとり親家庭の厳しい環境の中で、その苦難を他人のせいにしたり、政治のせいにすることなく、しっかりと乗り越えていく力を持っていることに感動しました。

小学生の作品からは、その年齢なりに、母親を楽にさせてあげたいとの思いが強くにじみでていました。

また中学生の作品からは、親への恩返しや自分の夢を叶えるために、努力していく姿勢が見られ、高校生からはひとり親家庭だけでなく、すべてのこどもたちの夢を叶えるにはどうするかという、政策提言が多くあったことも報告したいと思います。

これらの作品のひとつひとつに子どもたちの純真な魂の叫びがありました。涙無しには読めないものもあり、私も厚生大臣の任を担い、厚生政策に力を尽くしてきた者ですが、政治の貧困を痛感しました。政治の役割とはこぼれ落ちる人たちを切り捨てないことだと思います。作品を寄せてくれた子どもたちは、自分で人生を切り開いていける子たちであり、決してこぼれおちる子ではありません。しかし、夢など持てないという子どもも沢山いるのです。

私たちは、作品からにじみ出る魂の叫びをしっかりと受け止めるだけでなく、その背後にいる多くの子どもたちのために、今後もこの作文コンクールを続け、政策提言を行なっていく責務を、子どもたちからいただいたと思っています。このような作品をいただいたこと、こういう子どもたちを育てられた親御さんたちにも感謝しつつ、全体の講評とさせていただきます。

審査員長
丹羽 雄哉

開催概要

■作文コンクール概要

テーマ : 「わたしの夢、ぼくの夢」

対象 : ひとり親家庭の子どもたち

作文応募 : 小学生部門、中学生部門、高校生部門

それぞれ、優秀賞1名、準優秀賞1名、佳作3名の計15名

賞金 : 優秀賞10万円、準優秀賞5万円、佳作1万円

募集要項 : ◎応募作品は返却いたしません。

◎あなたの夢とともに、社会がどのように変化すればあなたの夢が叶うか、あなたの考え、意見も書いてください。

◎作品は必ず自分で書いたもの、未発表作品に限ります。

◎400字詰め原稿用紙4枚まで。ひとり何点でも応募可能です。

募集期間 : 2017年7月16日～9月30日

審査期間 : 2017年9月～10月 審査委員会にて選定

応募作品 : 43編

■表彰イベント概要

期日 : 2017年11月4日(土)

場所 : 子どもの国 (横浜市青葉区)

内容 : 受賞者への表彰状・賞金の授与。

主催者および審査員からのコメント

■主催

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

■後援

厚生労働省、社会福祉法人こどもの国協会、母と子支援議員連盟

■協賛

株式会社東武鉄道、ロイヤルホールディングス株式会社

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

■ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

委員長	赤松 良子	元文部大臣、日本ユニセフ協会会長
	丹羽 雄哉	元衆議院議員 元厚生大臣、母と子支援議員連盟会長
	坂口 力	元衆議院議員 元厚生労働大臣、母と子支援議員連盟副会長
	徳川 家広	徳川記念財団理事 作家
	横倉 義武	日本医師会会長、世界医師会会長
	一色 浩三	富国生命保険相互会社 取締役
	佐々木 典夫	社会福祉法人こどもの国理事長
	和田 勝	国際医療福祉大学客員教授、特定非営利活動法人あごら理事長
	円 より子	元参議院財政金融委員長、母と子支援議員連盟顧問

■審査員

委員長	丹羽 雄哉	元衆議院議員 元厚生大臣、母と子支援議員連盟会長
	阿部 彩	首都大学東京教授、「子どもの貧困-日本の不公平を考える」著者
	萱野 稔人	津田塾大学総合政策学部長・教授
	竹川 幸子	ハンド・イン・ハンドの会 元顧問弁護士
	円 より子	元参議院財政金融委員長、母と子支援議員連盟顧問

■事務局

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会事務局

〒102-0084 東京都千代田区二番町 1-2 番町ハイム 814 NPO 法人あごら内

Tel 03-6256-9023

Email info@hitorioyakatei-shien.com